



2014年4月

延藤が「縁がわ」視点で今を読み解く～ ENDOKUKAI 4 ～

『世界のすべてがエンガワになるまで』

- ・ 気軽にきて気軽に帰れる
 - ・ 一人ひとりがボーっとできる
 - ・ 老若男女がつどう場
 - ・ かかりあう場・出会う場
 - ・ 共につくり、飲み食べ、歌い、話し、笑い、心晴れる場
 - ・ 人と人が交差する自由空間
 - ・ 多様な価値観を相互に受け止め、認め合える相互理解の場
 - ・ 友だちを作る
 - ・ (人的ネットワークを広げる)
 - ・ 相互にかかわる中から
 - ・ お互いに気づきあう場
 - ・ 自己表現・感動を分かち合う場
 - ・ もっと素敵な生き方にチャレンジ
 - ・ するきっかけをもつ
 - ・ あらゆる情報の交差点
 - ・ 地域の中で起きているさまざまな
- 問題解決の端緒の場

これは、最近編集した「コミュニティカフェ・ガイドブック(愛知県版)」の巻頭にかかげた「こんなまちの縁側・居場所になったらいいな」一語か条である。これはスポットとしての「まちの縁側」にあてはまるだけでなく、人と人の出会いのコミュニティの育みの共通したモットーでもある。あるいは、一人ひとりの生き方において、他者との多様な出会いのあり方への願いを表している。

日々、不安や虚妄や傲りでイライラすることの多い現代社会にあって、誰もがみずから私らしく生きる、私からまわりとゆるやかに出会える、他者と柔らかに協働できる場・機会を求めている。流動する世界そのものから果敢に身を挺して、このような「心のエンガワ」を自らのものにするチャンスに偶然に、かつ必然に遭遇する幸せを媒介する「縁人」になることを夢みたい。そのような「縁人」は、人・まち・コミュニティの内から「ココロの縁が輪」を育む「エンジン」の持主である。生きとし生けるもの、ヒト・モノ・コト・トキがつながりあう「ココロの縁が輪」を自他の中に育み続ける、即ち、世界のすべてがエンガワになるまで旅を続けたい。

目次

◆ PROJECT ENGAWA

- トーホク志援プロジェクト#4 ————— P.2
- 錦二丁目長者町まちづくりコーディネート#5 ————— P.4
- まちまるごとトリエンナーレを楽しむ「まちトリ」 — P.6
- つくろうひらこう あなたの「まちの縁側・居場所」 P.9

◆ まちの縁側育み事業

- ジ初カFeだより — P.12
- まちの会所通信 — P.14
- GOGO!ルポ ————— P.16

物語復興が時間の力によってひらかれていくか？

～ 仙台の「荒浜再生を考える会」の活動を支援して ～

「今回の震災では、集団移転や危険地域指定などにおいて、既存の制度を杓子定規というか誤って運用しているために、復興事業が大幅に遅れて被災者に苦痛を強要する結果になっている。」と語ったのは、災害復興のハードとソフト、事業と生活を包括的に

理解し理論的・実践的に方向づけるこ

とにおいて、今日日本でナンバー1の室

崎益輝先生である。2013年5月2

5日、26日「おら浜荒浜フォーラム

Ⅱーふるさと荒浜の里海を考えよう」

の基調講演での室崎先生発言は、問題

の本質をつき、これからの展望をひら

くことにおいてワクワクする感動的

な内容であった。それは私たち NPO

が、何故仙台市民「荒浜再生を願う会」

を支援しているかについての論点が

系統的にすくいあげられていた。とり

わけ、1989年にサンフランシスコ大

地震で甚大な被害を受けたサンタク

ルーズ部の復興ヴィジョンの中に、

「夢を紡ぐ復興構想」は、「物語復興」

として私たちの支援の方法と合致す

るものである。そこでは、被災者一人

ひとりが復興への思いを語り、その思

いを綴ってつくりあげた文学のよう

な復興のヴィジョンをさす。ほぼ全員

が参加した集会で、子どもが「子犬と

遊べる広場が欲しい」、大学生が「コ

ーヒーが飲めるベンチが欲しい」、お

ばあさんが「花いっぱい街かどにし

て欲しい」と語った思いをすべて計画

に盛りこんだ。「花いっぱい街の中

に、教会は元通りの形で再建され、そ

の足元の木陰で子供が子犬と遊んで

いる、・・・そんな街を再興しよう」

と、その後復興計画には書かれている。

室崎先生はそれを「物語復興」と呼び、

物語復興の取りくみから、「思いを形

にするプロセスこそ復興の核心だ」と

いうことを、仙台市民及び全国から集

まった人々に呼びかけた。「荒浜再生

の会」に集まる住民は、まさにこのよ

うな発想で、ふるさと再生への思いを

活動の風景として紡ぎ、世論を喚起す

るプロセスをこの1年も歩み続けた。

5月の田植えに引き続き、11月には

前年に建てられた荒浜ロッジの隣に

東屋をつくり、お正月には新年早々、

もちつき大会等が行われた。そのたび

に再生を願う会メンバーだけではな

く、支援者たちも集まり、ふるさと

風景づくり活動をわかちあった。

しかし、一方で行政による現実的な

かつ強圧的な動きに直面しつつ、他方

で再生への実践的展望が見えないこ

とで、住民たちは極度な不安に迫いや

られる時がくる。そんな時、親世代の

不安からの動揺をみせる消極的態度

に対して、次世代は次のような積極的

姿勢をみせるようになった。例えば、

共働きの夫婦の子であったために「お

ばあちゃんっ子」として育てられたあ



室崎益輝先生 (神戸大学名誉教授)



る住民の息子は、「おばあちゃんの死期が近づいた時は、荒浜の海辺に小屋を建ててそこでおばあちゃんが海を見ながらあの世に行けるようにしたい。」と語っている。また別の住民の息子は「今年は海水浴場を開きたい。僕はサーフアーショップを開く」とつぶやいている。

このような次世代の海に向き合う暮らし方をあきらめずに行動に出ようという発言は、親世代をして「住まいづくりはすぐにはかなわなくとも、海や農の幸を生かして仕事づくりや、海辺でのレジャーづくりを重点的にやっていこう」のポジティブな姿勢を引き出している。

こうしてふるさとの風景づくりの物語の「揺らぎ」がおこる時、次世代がもうひとつの物語を紡ぎ出し、物語の「持続」が生起していく可能性がここにはあらわれている。

物語復興がどのように進行していくか、全く予断を許さない状況ではあるが、時間の力によって、幸せな物語がはびこることを願いながら、私たちNPOは遠くから仙台荒浜再生を支援し続けたい。

(延藤)

コラム

仙台荒浜訪問を終えて
(2014年2/19-20日)



『(現地再建が)実現した時に私は生きていなくても、おばあちゃんがやってきたことは間違ってたかったんだ。おばあちゃんたちが故郷を諦めないでいてくれたから今がある』孫にはそうおもってもらいたい(sさん)。「そうやって粘り強く、黄色いハンカチやふるさと蘇生の活動はつづいていきます。海岸線をふるさととして守ろうとする人の行動がいかに正しさと公共性がある事なのか、ちゃんと、記録して伝えないと。名古屋からでは本当はささやかな事しかできないけれど。私にとって、新しいスタートをきる事が出来た2日間の訪問だった。久しぶりに仙台荒浜で、じっくり、何の立場も隔てもなく、皆さんの本音に耳を傾けることができ、感謝の気持ちでいっぱい。秀子さんが松かさを拾って作ったリースが本当に見事だった。(名畑)

錦二丁目まちづくりマスタープラン 実行プロジェクト レポート

3年前の2011年に、錦二丁目の「まちづくり構想」（これからの錦二丁目長者町まちづくり構想2011-2030）が出来上がってから、劇的に地域主体のまちづくりがこの街で回転しはじめた。長者町の都心居住とコミュニティを再び増やそうとする「長者町家プロジェクト」、住みやすい長者町を目指して安心安全な野菜を提供する長者町マルシェの「産業振興プロジェクト」、錦二丁目の都心地区で地域が自然エネルギー活用を進める「自然エネルギー活用プロジェクト」、あいちトリエンナーレをきっかけにアートの街なか展開を進める「まちとアートの融合プロジェクト」など、様々な重点プロジェクトが、構想に位置づけられて、それぞれ街の人がプレイヤーとなって一斉にスタートしていった。

一般に、行政が作った街づくり構想



伊勢湾流域の山間部の森林が木材として活用されな
いことで、地球温暖化や生

では、住民の参画はとかく、「要望型」のスタンスに陥りやすく、地元住民自らが構想実現のプロジェクトを立ち上げることはあまりない。この錦二丁目の構想は最後まで住民発意で作りに上げていった構想だから、実現プロジェクトも地域の自主的な取り組みとしてい立ちあがってきたんだと思う。
さて、前置きが長くなったけれど、我々NPOまちの縁側育くみ隊が支援する「錦二丁目長者町まちづくり」の報告として、具体的な取組みが進んでいる2つのプロジェクトを以下にご紹介します。

●都市の木質化プロジェクト

物多様性、さらには治山防災などの面で様々な問題が生じています。こうした問題は山側だけの問題ではなく、街側にも影響を及ぼす重要な問題です。一方、長者町では鉄とコンクリートに囲まれ殺伐とした都市空間が広がり、自然の木材を都市部で積極的に活用していくことで、街側の課題の解決に役立てつつ、山側の材木の良い循環を生みだし、森林の健全な維持管理や地球規模の大きな課題解決にもつなげていく、そんな壮大な目標をもった取組みが「都市の木質化プロジェクト」です。

具体的な取組みでは、名古屋大学と協力して、三河山間部の森林組合などと交流して山の状況を学び、長者町の街なかで「ストリートウッドデッキ」を大学生や地域の人たちで組立て、設置しました。これは長者町に不足する休憩スペースを、木材を使ってセルフ



ビルドでつくるといふ実験的な試みで、平成24年度木材活用コンクールに応募して第4部門賞を受賞しました。プロジェクトリーダーを務める滝一商店の滝一之さんのお話しが印象的でした。「長者町はこれまで目先の商売つまり経済でしのぎを削ってきた街だけれど、これからは街に文化が必要な時代になる。木質化プロジェクトは単に損得勘定ではなく長者町の文化の一つになる可能性を持っている。次世代へどんな街と文化を残すのが試されている。」その他にも、あいちトリエンナーレにあわせて長者町のおもてなしベンチの設置や、長者町ミツバチを飼う龍屋ビル屋上の木質デッキ化、吉田商事1階ショールームの床の木質デッキ化など、次々と長者町の木質化が進められています。

●公共空間デザインプロジェクト

街なかに会所や路地空間の実現を目指す公共空間デザインプロジェクトでは、長者町通りにおいて自動車の一方通行逆行や、狭い歩道空間で歩行者と自転車の錯綜などが問題となっていることから、町内会と協力して、長者町通りの車道を狭めて歩道を拡幅する社会実験を行うことになりま

した。震災復興後の昭和50年には歩道が両側に4m幅ずつあったのですが、高度成長期には長者町通りが大渋滞して昭和60年代に歩道を1mずつ狭め車道を広げて現在に至っています。しかし、今は繊維問屋も減り、物資流通も少なくなった今は、一方通行を逆行できるほど自動車交通量が減り、一方でオフィスや飲食店が増えて歩行者交通量が多くなっています。これからの時代を見据えて「クルマ中心から歩行者中心のみちづくり」へむけて長者町通りの再編成を計画しています。

まずは、長者町通りで一時的な歩道拡幅の社会実験を実施して、将来的な通り再編を検討材料とします。社会実験では先ほどの「都市の木質化プロジェクト」と協力して、木質デッキによる歩道拡幅実験を計画しています。しかし、木造の歩道設置は名古屋市も前例がなく、交通安全対策や表面の滑り対策など幾つかの実施条件が提示され、それらを一つずつクリアして実施へ向けて取組んでいます。

2014年の春から夏にかけて長者町通りの道路上に素敵なウッドテラスが出現します。

(藤森)



スケッチ：河崎泰了

あいちまちなかトリエンナーレを楽しむ「まちトリ」



2013年8月10日～10月2

7日に現代アートの国際芸術祭「あいちトリエンナーレ2013」が名古屋と岡崎の街なかを会場にして開催された。せつかく芸術祭に名古屋や岡崎の街を訪れたなら、アートと一緒に「まちの魅力」も楽しんでもらいたいと、トリエンナーレの来場者に街を紹介するプロジェクトが「まちトリ」です。愛知県の緊急雇用創出事業として募集があり、オフィス・マッチングモウル、NPOまち育てセンターりと一緒に3者のコンソーシアムによって応募し、担当することになりました。私たちNPOまちの縁側育くみ隊は、主に名古屋会場を担当して以下の事業を行いました。

- ① 「みちくさ案内図NAGOYA」の製作、配布。
- ② 会場間を移動しながらまちの魅力を案内する「みちくさガイドツ

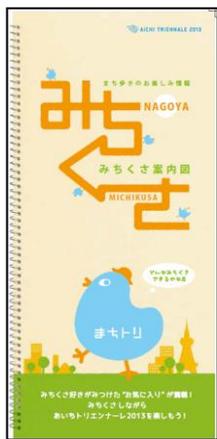
アー」の実施。

- ③ 名工大早川先生の協力を得てオープンストリートマップを活用した街の魅力投稿システム「まちトリWeb」運用、およびホームページやtwitter、facebookを使った情報発信と参加者コミュニケーション。
- ④ 「百人百景」や「幻燈会」「布絵ワークショップ」といったアート関連ワークショップの実施。
- ⑤ まちの案内所「長者町ビジターセンター」を運営。

①「みちくさ案内図NAGOYA」の製作、配布。

トリエンナーレ名古屋4会場（愛知県芸術文化センター、名古屋市美術館、長者町会場、納屋橋会場）とその周辺の街の魅力を紹介するマップを制作した。4つのエリア（長者町、納屋橋、

白川公園、栄）と5つの界限（丸の内、栄ミナミ、御園通、円頓寺、四間道）を中心に独自に調査を重ね、一般の観光案内とは違う視点でのオリジナルな魅力紹介マップができました。



②まちの魅力案内する「みちくさガイドツアー」の実施。

名古屋の4会場（愛知県芸術文化センター、名古屋市美術館、長者町会場、納屋橋会場）の会場間のみどころを事前に調査し、紹介ポイントやルートを選定して楽しくめぐる6つの基本ガイドコースを設定してトリエンナーレ会期中61回のガイドツアーを開催した。その他に、是非とも知ってほ

「大名列 de MISONO」の様子と
ツアー案内パンフレット



しい街の魅力を凝縮したテーマツアーを20回開催した。その楽しい内容はツアータイトルからもわかります。「切り取る、街撮る、歩いとる!」「古地図・古写真片手に街の移ろい体感ツアー」「大名列 de MISONO」「本日もパワースポット」など楽しい街の見所がいくつも開発されました。



こちらは、「あいちトリエンナーレ2013 まちなか展開拡充事業」連絡「まちトリ」です。
「あいちトリエンナーレ2013での「まちなかガイド」ワークショップやアーティストトークなどの「イベント」
※上では地図システム「みちくさ」をご利用しています。
※※、是非ご利用ください!

地元の人が来場者の「お気に入り」を「私のみつけた新名所」として紹介中。
気分や目的にあわせて選べる情報満載!

③街の魅力投稿システム

「まちトリWEB」の運用

名古屋工業大学大学院 産業戦略工学専攻 伊藤孝行研究室、名古屋工業大学 コミュニティ創成教育研究センターの協力を得て、オープンデータベースマップの OpenStreetMap を活用した、“まちの魅力”を地図上に投稿できるシステムを開発し、ガイドツアー参加者やスタッフからの投稿で運用しました。それとあわせて、ホームページや twitter、facebook を使った情報発信と参加者コミュニケーションも活発に展開しました。

④アート関連ワークショップ

「百人百景」や「幻燈会」「布絵ワークショップ」といったアートと街を

つなぐようなワークショップを企画実施した。(百人百景の様子は次頁)
⑤まちの案内所



「長者町ビジターセンター」の運営
長者町アートアニュアルチームと協力して、トリエンナーレ期間中に小さな空きビルを借り、地元が運営するビジターセンター&カフェを開設運営した。まちトリ事業ではガイドスタッフの拠点であり、ツアーの発着地点として様々な情報発信と案内を行いました。

以上、トリエンナーレ開催の3カ月と準備期間を含めた半年間の「まちトリ」事業を振り返って、街にはつきない魅力が潜んでいて、生き物のように常に変化しているのを感じとりました。今回はかなりの手間をかけて街の魅力の発掘作業を行ったのですが、それでも街の魅力はまだまだ潜んでいる、語りつくせない魅力があると感じました。そうした発掘した魅力を、何らかの形でそれぞれの街にお返ししたいという気持ちになっています。

(藤森)

まちトリワークショップ 百人百景



百人百景とは、百人の人がそれぞれの視点でまちを切りとる、まち歩き写真撮影会です。7月20日の撮影日には、3才から80歳までの112名の方による撮影会となりました。近隣の方から、遠方は福岡県からもご参加いただきました。撮影エリアの名古屋城下の碁盤割のまちの見所について瀬口哲夫先生（名古屋市立大学名誉教



授)のお話に耳を傾け、出発！百人は各々がフィルムカメラ“写ルンです”片手にまちを歩きました。

9月23日～10月4日には、112名の方が一人一人撮影されたフィルム1本分27枚を全て展示しました。(会場：名古屋テレビ塔)

●「百人百景」を持続させよう！

延藤安弘

深い直感をもって、軽いノリをもって、112人の参加者はまことに多様なまちの景色を撮りました。なつかしい潤いのある木造の建物、人々に呼びかける生きのよい看板、個々の緑のじみだしと大きな樹木、得体の知れな

い不思議な像、ネコのたたずまい、橋のランカンの丸い輪のリズム、桜通りのドンツキに人の眼を止めてくれる背高ノツポビル、軒先の自転車からむ朝顔・・・等々。旧さと新しさ、骨格と細部、自然と人工、空間と人々の営み、前景と後景、低さと高さ、固いものと柔らかいもの、等がゆるやかに絶妙に混ざりあうまち、名古屋の混成とアンサンブルの妙が、「百人百景」として表現されました。その意味することが多様であり、百の意(ココロ)が表されていることから、「百人百景百意」といつてもいいでしょう。

撮影された写真は、モノを中心に切りとっているようですが、よくよく見ると、それらは人とまちの間に発生している「好き」・「愛着」の感情を表現しています。まさに「百人百景」というイベントは、市民のわがまちへの愛着・愛好の表現活動なのです。参加者ひとりひとりが撮る行為を通して、「私の好きなまち」を発見し、発表と応答を通して、そのことの意味が確認されていき、まち好きの内容が深められていきます。

「百人百景」は、市民がまちを好きになり、関心をもって、自らまちを育むことに身を乗り出していく流れ

を呼び力をもっています。「百人百景」は市民主体のまちを育むムーブメントになる可能性を秘めているのではないのでしょうか。参加者の楽しさ溢れる撮影と撮られた写真の意表をつく面白さにふれて強くそう感じました。

今後に向けて、「百人百景百意」の取組が持続されることを期待しています。



まちの縁側を増やし、つながりを広げる事業「コミュニティカフェ開設講座・ガイドブック作成」

しくろっつ ひらろっつ あなたの「まちの縁側・居場所」

●コミュニティカフェ

今回の事業は、コミュニティカフェの開設講座運営と、愛知版コミュニティカフェガイドブックづくりの2本立ての事業です。延藤先生の縁で東京の「公益社団法人長寿社会文化協会（以降WAC）」が発注者になります。

WACは「コミュニティカフェの普及事業を行っています。平成25年度「独立行政法人福祉医療機構（WAM）」の助成を受け、WACは神奈川・愛知・金沢・京都の4地区のNPO法人と組んで4地区での開設講座の開催と、東京を除く4つの県でのガイドブック作成と、全国フォーラムの開催、研究会を開催する事業構成の中、愛知は私たちまちの縁側育くみ隊が担うことになり展開していきます。

ところでコミュニティカフェとは幅広く捉えられている名称で、まちの縁側・居場所を含みます。地域コミュニティの活性化と地域での生き甲斐づ

くり、社会的貢献や福祉的側面を持つカフェや居場所で、この混沌とした時代先行き不安を感じる現在、確かなコミュニティの場が急激に増えてきています。まちの縁側育くみ隊の設立主旨にぴったりとマッチングした内容でした。



開設講座 第1回まちの縁側GOGO!にて、永井さんよりわらいヨガを実演体験

●開設講座についてお伝えします。

参加呼びかけのプレ講座と5回の連続講座で現場見学付で、参加費3千円定員20名、さらに東京フォーラムに2名の発表が出来るようにコーディネートするの役割。さて私たち団体の良さを活かそうと、毎回違う場所での開催、参加者同士の交流触発のワークシヨップを盛り込み、キモチ・カタチ・シクミ・ウゴキ・発表のステップアップ型の講座を構成しました。

プレ講座では、まちの縁側のパイオニアである丹羽國子さんと、延藤先生から今求められるまちの縁側について示唆に富んだ映像とお話して、丹羽さんからは「生涯発達する人々の潜在能力を蘇生させる、まちの縁側の自律的効果」等を投げかけてもらった。20代から70代までの19人が参加して開設講座は始まりました。

第1回「キモチづくり」では、延藤先生のミニ幻燈会から、コミュニティカ

フェ・まちの縁側への、キモチづくりからスタートした。訪問地である「まちの縁側GOGO!」「くれよんBOX」では実践的な話を聞き、受講生の自己紹介とキモチを語り合い交歓させた。



開設講座 第1回くれよんBOXにて、山口さん大久保さんから経験談を聞く

第2回「しくみづくり」では、尾張一宮「Com-CAFE 三八屋」星野さん、コミュニティカフェの運営と経営さらに、仲間づくりや、おまつりの苦労話、開設の際の公的・民的支援など掘り下げたお話しと解説で実践的に学んだ。まとめからは、「志縁を掘り起こし、地域に耳を澄まし、志民仲間を育もう、巻き込もう！」「クリエイティブな小さな力の表現の場（絵本・農・食・精神障害など）は人間もまちな輝かせる！人をはぐくみ、まちを発展させる」が導き出された。



第2回 com-café 三八屋にて星野さんより実践的な運営内容とまちづくりを聞く

第3回「カタチづくり」では、坪井から、住民参加での公共施設づくりによって、まちの縁側化された、小牧市味岡児童館の展開を聞き。一つのグループでコミュニティカフェにて展開される物語を綴り交歓した。

第4回「うごきづくり」では、名畑さんから長者町での「まちがコミュニティカフェ」となる活動を聞き、各自が提案づくりへと進化させた。まとめからは「良い場所の判断は色々あるが、人間の内面から発する生きるリズムが良い物差しではないか。①主自らの生きるリズム ②ユーザーの生きるリズム ③まちの生きるリズム 地域で悩んでいる人、まちの悩み、まちの生きる力を南面から弾ませる仕掛けを」が生まれた。

第5回「提案づくり」では、これから展開される活動やコミュニティカフェから生まれる喜びを発表し、発表後講師陣からの講評を聞きとメールを受けた。

2月23日の東京でのフォーラムに参加したのは、岡田浩彰（おかだ・ひろあき）さんと奥田陽子（おくだ・ようこ）さんが選出されました。岡田さんは「Take your Favorite!」をキーワードに、多世代のお客さんが好きなモノ・コトを自由に表現できる



東京フォーラムにて発表する岡田さん「Take your Favorite!!」

ノ・コトを持ち込み、一緒になって楽しめる場として、奥田さんは高齢者が気軽に行ける、「物理的にも精神的にもバリアフリー」な場としてコミュニティカフェを提案した。

岡田さんのコミュニティカフェに対する根本的な考えは「まずは自分の居場所となるようにコミュニティカフェをつくり、それが誰かの居場所となってもよい」というもの。岡田さんにとつての居場所とはどんな場所なのか。その答えのひとつが、「自分の好きなモノ・コトを自由に表現できる場所」である。まずは岡田さんが好き

なモノ・コトを通してお客さんと交流する。次に、お客さんが好きなモノ・コトを持ち込み、自由に表現してその場にいる人と一緒になって楽しむ。そんな風にコミュニティカフェを育みたい。だからキーワードは「Take your Favorite! あなたの好きなモノ・コトを持ち込もう！」。自分の好きなモノ・コトを自由に表現し、他者から共感を得たり、つながりを作ったりすることならインターネットでもできる。それなら、なぜコミュニティカフェが必要なのか。それは同じ場に居合わせることで大事だと考えるからだ。「リアルな場で、五感を使って刺激を得られる場所。公民館とカフェの中間であり、いいとこ取り。」岡田さんはこんな風にコミュニティカフェを表現した。

岐阜市で作業療法士をしている奥田さん。高齢者や障がい者が仕事・遊び・日課・休息などの日常の作業を行えるようになることで、その人らしく生きていけるようサポートをしている。以前、奥田さんは病院で働いていた。病院では決められたリハビリしかできない、病気になった人しか見れないなど、「制度の不自由さ」があり、もの足りなさを感じていたという。奥田さんは病院を辞め、再スタートを



東京フォーラムにて発表する奥田さん「ふらっとカフェ」を披露する。

切るまでのあいだ石垣島で休養をとることにした。石垣島では周りの人が暖かく接してくれた。周りのお年寄りも生き生きとしていた。「地元のお年寄りもこうだったら良いのになあ」「いつか自分でもこんな場所をつくってみたいなあ」と思ったそうだ。そんな時に今回の講座について知り、参加するために石垣島から帰ってきたのだった。奥田さんが提案するコミュニティカフェは「ふらっとカフェ」。「ふらっと立ち寄れる場所」「空間も、心もバリアフリーな場所」という意味が込められている。「ふらっとカフェ」に

来たお年寄りは、趣味や生き甲斐を通してリハビリができる。病気でなくとも体やこころの悩み相談ができる。「ふらっとカフェ」はこのように、制度内福祉では対応できないコトを補完する役割を担っている。現在、奥田さんは小規模デイサービスで働いている。新規事業所を出店する計画があり、そのでのコンセプトとして「ふらっとカフェ」の考え方が採用されたとのこと。更なる進展が期待される。



● コミュニティカフェガイドブック
愛知版の作成について

進めるに当たって編集チームを作りました。延藤先生からは活きた写真で活動を触発させる美しいガイドブックを目標に薦めました。エフェクトのあいざわけいこさんにアートデレクションを担ってもらい、名古屋大学大学院の中村友亮さんと育くみ隊からは名畑さんと坪井にて進めました。

愛知県内の情報を収集し28箇所を取材しました。取材先では地域に密着しつつ社会的課題を解決津べく多くの知恵がまつていて、みなさんの実践には大きな刺激を受けました。

● ZPO 法人まちの縁側育くみ隊を立ち上げたのは2年前、地域に密着し老若男女がふらっと寄れるまちの縁側に時代を救う可能性を感じていました。志民発話のコミュニティの場・まちの縁側は多様な成長を遂げていて、曼陀羅多色刷りの様相「人も心も暮ら

しから豊かに・思いをつなぐところ・若者もお年寄りも世代を超えてミッションを感じたらひたすら動き出す・笑顔と涙がエネルギー・子育てまるとまら育て・苦労も生き甲斐」様々に増殖していました。これからさらに混沌とした世の中になっても、コ

ツコツ・ニコニコ・フワフワとして漂いながら賑わうコミュニティカフェ・まちの縁側には未来を生き抜く確かな生命力が宿っていました。皆さんもコミュニティ巡礼の旅へ出かけてください。



● この事業の成果として

この事業の成果は、①開設講座受講生の皆さんとの新たなご縁が出来たこと。②取材先の皆さんの活動に知恵があり斬新で若者も輝いていたこと、③今までまちの縁側育くみ隊活動でお世話になった方と一緒に事業が出来た事、④地区の団体との新たな交流が出来たこと、⑤活動を触発させるガイドブックが出来あがった事、⑥今後につながるヒントを制作メンバーと苦労と共に分かち合った事、この6つの実りを運んでくれました。

(坪井)

ジネンカフェ だより

NPO 法人くれよん BOX、
かたひらかたろうとの協働プロジェクト
問合せ（担当：大久保）
Tel / Fax 052-201-9878

平成十九年一月から始めたジネンカフェも、来年度（二十五年度）で七年目を迎える。回数にすると、この四月で八十一回目。プロジェクト当初、スタッフと冗談まじりに話していた目標の三桁台も、夢の数字ではなくなってきた。始めの頃は福祉系が多かったゲストも、最近では様々な分野で活動・活躍されている方々をお招きしている。分野は違えど自分らしい生き方をされている方というのは、どこかに共通点があり、それぞれが夜空にきらめく星座のように魅力的でもある。謝礼も交通費も出せない貧乏プロジェクトにも関わらず、みなさん快くゲストをお引き受け下さり、本当にありがたく思う。

やるには、「こうして人前で話をすると、自分にとっての振り返りになるし、自分では気づいていなかったことも、大久保さんのまとめを読んで（ああ、そういうことだったのか〜）と納得することがある」そんなのだが、ひとはそれぞれそのひと固有の物語をもっているものだ。しかし、その物語をいちいち意識しながら生きていく人も少ないだろう。ゲストの方々が語るエピソードの断片を紡ぎ直し、一筋のストーリーとして組み立ててゆく…。それが物書きであり、ジネンカフェプロジェクトのリーダーでもある私の務めだと思っている。

さて、今年度も都合十五名の方々に越し願ったわけだが、毎回の詳細なまとめはブログをお読みいただくとして、ここでは特に印象的だった二名と二組のゲストのお話を簡単に振り返りたい。今年度は三年に一度の（あいちトリエンナーレ）の開催年でもあった。それにあわせた訳でもないのだが、ジネンカフェも何かしら表現活動をされているゲストさんが多かったように思う。

今年度の最初、5月のゲストは、劇団へブン&アース代表の水野杏南さんだった。幼い頃からクラシックバレ



ジネンカフェvol.71 水野杏南さん

エを習い、紆余曲折を経ながらも演劇の道へ進まれた。現在はコンテンポラリーダンスサーと、劇団の代表と、住宅展示場の催し物の進行役のバイトという三足の草鞋を履きながら生活されている。晴天であればくれよんBOXさんのお庭で得意のダンスをご披露して下さる予定だったが、この日は生憎の雨でたまたまくれよんカフェに来ていたお客さんの子どもさんと、人気アニメの主題歌にあわせて軽く踊るといってお茶目な一面も覗かせていただいた。印象深かったのは、ダンスにしろ、演劇にしろ、表現することの楽しさと苦しさを語る中で「それ

でも私は表現したいんです。表現することが出来ないなら、私は死んでしまおう…」と言い切っていた彼女の張り詰めた表情と言葉だ。若い頃から文章表現をすることが自然なことになっていく私には、共感を覚えた言葉でもあった。

6月のゲストは、名古屋の都心・新栄にあるシェアハウス・うずみんラボの白川陽一さん、加藤舞美さん、森田恭平さんのお三方であった。うずみんはマンションの部屋をオーナーの許可を経て、自分たちでリノベーションしてつくりあげたシェアハウスで、単にその生活空間をシェアするだけでなくとどまらず、壁や床などの空間づくり自体をワークショップにしたり、都会におけるまちの縁側になったり、そこから別の活動が派生するフューチャーセンターとしての側面もあつたりと、多角的な可能性に満ちた空間らしい。ただ、つくりながらの運営でサクラダ・ファミリア大聖堂になぞらえて「永遠に未完成なんじゃないの?」と、苦笑されていた。住まい方も自己表現のひとつだとするならば、彼らもやはりアーティストと呼べるのではないだろうか。（うずみんは一定の役割を終え現在は解散。お三方ともコミュニ

テイに関わることを生業としている)
11月のゲストは、名古屋を中心に
県内各地でアートプロジェクトやア
ート展などの企画・主催をしているオ
フィス・トレ・プンテの亀山よう子さ
んと芝裕子さんであった。(トレ・プ
ンテ)とは、フランス語で(三つの点
という意味らしい。(トレ・プンテ)
のもうひとつの点、神森珠美さんもこ
の日は参加者としてお越し下さって
いた。オフィス・トレ・プンテは最近
障がい者生活介護施設を運営するN
PO法人ポバイさんと連携して、文化
のみち榎木館で障がい者アートの展
覧会を企画したり、モリコロパークで



ジネンカフェv.1.73
オフィス・トレ・プンテによる
アートワークショップの様子

アートワークショップやシンポジウ
ムを開催したり、親子対象のアート遊
びプロジェクトを通じて一般的には
まだ馴染みが薄いアートを身近なも
のとして楽しんでもらうための活動
を展開されている。この日もそれら活
動のお話と共に、参加者一同くれよん
BOXさんのお庭でアートワークシ
ョップを楽しんだ。

年が改まって2月のゲストは、まち
の縁側育くみ隊とも、まちの会所があ
る長者町とも所縁が深いクリエイテ
イブ・ディレクターの原愛樹さんであ
った。原さんは現在週に二日間古屋
大学にデザイナーとしてパート勤務
されながら、小牧や長者町でデザイン
を介してひとと地域とを繋げる活動
をされておられる。クリエイティブ・
ディレクターとして、現在の原さんが
目指されている(共創)の原点となる、
名古屋大学の理系学生さんたちとの
コラボの話。それがご縁で長者町と出
会われ、それがまた小牧の活動へと繋
がっている…。ご縁がご縁を呼ぶ世界
である。世の中は縁によって成り立っ
ている。しかし、縁から縁を呼び込む
には、そのひと自身の(縁アンテナ)
の感度がよくなってはいけない。そし
てそのご縁を素直に受け取る柔らか

なところが大切であろう。原愛樹さん
というひとは信念の人で硬そうにみ
えるけれど、同時に柔軟な感受性を持
ちあわせた人なのだと思う。

そういう原さんが携わったプロジ
ェクトは、その時限りのものではなく、
その後も継続・発展、あるいは(長者
町カルタ)のように、ひとり歩きをし
ているものが多い。そこには(共に創
る)ことで生まれる地域の連帯感、自
分たちが住み、勤める地域を、自分た
ちで見守り、育んで行こう！という
地元愛が、風の人でもある原さんによ
って芽生えさせられるからではない
だろうか？ 加えて原さんがもつ軸
のぶれない、揺るぎない考え方や信念、
振る舞いが、地域の人たちの地域活動
への参画意識を呼び覚ますのだろう。
原さんのこの日のお話のタイトルは
『参加から参画へー(共に創る)が生
み出すもの』だった。ひとは誰もが生
まれると共に地域社会の一員となる。
しかし、それは地域に参加していると
いうことに過ぎない。地域社会のため
に自分に何が出来るのか考え、行動す
る…。それが参画というものなのだ。
この日の原さんのお話の中で私が
一番目から鱗が落ちたのは、(アート)
と(デザイン)の相違の説明だ。

(デザイン)には社会的な目的がある
が、(アート)にはそれが無い。ここ
ろに訴えかけるのが(アート)で、か
らだに訴えるのが(デザイン)である
…。なるほど。引つ込み思案だった少
女か、コミュニケーションとして絵
を描くようになり、やがては生きてゆ
く(武器)としてデザインを仕事にす
る。そしてその(デザイン)という自
分の得意分野を活かして、ヒトとモノ
とチキとを繋げる活動を続けてお
られる。それはあたかも原さんご自身
が(参加から参画へ)至った道程と呼
応しているようで、私には興味深く感
じられた。(大久保)

※ ジネンカフェブログ
<http://blog.goo.ne.jp/jinencafe>

ジネンカフェv.1.79 原愛樹さん



まちの会所 通信

名古屋市中区 錦二丁目・長者町地区
まち育て拠点「まちの会所」
問合せ（担当：名畑）
Tel / Fax 052-201-9878

『まちの会所通信』は、多様な活動・人の交流拠点となっている「まちの会所」より、日々の出来事の意味を発信する連載です。2013年9月からは、長者町新聞という地元の織物共同組合の新聞でも掲載していただけるようになりました。小さなエリアの取組が、遠くはなれたあなたの町でもヒントになったり、考えるきっかけになったりしたら、うれしいです。

*

他地域への思いやりが長者町の文化

「都市の木質化という山元の森林に配慮するプロジェクトは、わたしたち長者町地区が他の地域への思いやりという文化を標榜する活動なのです。繊維問屋街のかつてあった問屋の志は、こういう他者への配慮の文化度をあげる土壌づくりをもっとしていく

ことで継承していきたいのです。」（問屋業を営むTさんの発言）他地域への思いやりの文化というのは他のプロジェクトでも目指したい、長者町の活動の広い意味での社会性を押し上げるキーワードとしてみなさんの耳目を集めていました。

*

まちのしゃべり場「まちとアート」 あいちトリエンナーレ2013の 経験が長者町にもたらしたもの

まちのしゃべり場が2013年1月28日18時30分から、丹羽幸株式会社桜通店2階を会場に行われました。長者町の人を中心としてあいちトリエンナーレ2013の展開を推進する「推進チーム」の企画です。

錦二丁目・長者町地区は、あいちトリエンナーレ2013を経験することによって、多様な人々との出会いとまちの新しい魅力の発見をしてきました。そこでわたしたち長者町地区から関係者のみなさまに感謝の気持ちをお伝えするとともに、まちとアートの出会いの意味を深めるためのふりかえり幻燈会と座談会のくみたてでのご案内しました。

延藤安弘氏によるふりかえりの幻燈会では、アートとまち育てが有機的につながっている様子が600枚もの

スライドをつなげて沢山の物語として伝えられました。例えば、2010で行われた路上パフォーマンスは、その後のまち育て活動で積極的に公共空間を活用していこうという「公共空間部会」の今日のとりくみのイメージを豊かに押し上げてくれたこと、まちの人でその公共空間にもてなしのスペースとして都市の木質化でしつらえられたベンチを2013では提供できたこと、まちの人とアーティストがお客さんをもてなす「ビジターセンター&スタンドカフェ」が人と人の出会いの場としていかに豊かに運営されていたか、アーティストたちの意表つく表現がいかに私たちにまちへの新たな想像力を喚起してくれたか、アート作品であった山車をまちの人自身で曳くことで難しい問題を乗り越え自分たちのものにし、トラブルをエネルギーに変える力をつけてきたこと・・・。

その後、堀田勝彦さん（あいちトリエンナーレ2013長者町会場推進チーム）が司会を務め、座談会が行われました。あいちトリエンナーレの長者町での展開が2010と2013ではどちらがうかの論点整理を武藤隆さん（あいちトリエンナーレ2013アーティスト）が提起し、中でも「まち

の人のスタンスが、2010では受け入れる態度だったのが、2013年には一緒に盛り上げる存在に変わった」という指摘を中心に話が展開していききました。「一緒に盛り上げてきた」担い手の代表として登壇したのは、武藤隆さん（前掲）、吉田有里さん（あいちトリエンナーレ2013・アシスタントキュレーター）、山田訓子・加藤伸葉さん（長者町まちなかアート発展計画）、古谷萌子さん（長者町アートリアル実行委員会）、山口剛史さん（あいちトリエンナーレ2013長者町会場推進チーム）がそれぞれ自分の関わりについて発言しました。会場からは「2010の時に強く感じたア



会場には60名以上の人があつまった

ートに対しての違和感が、2013になって、住人として同じ呼吸をしてきた印象に変わった」（本重町町内会長の小出祐弘氏）。トリエンナーレのお客様にまちなかガイドをしていた（通称・まちトリ）中森さんは「まちの人とのコミュニケーションの中で、まちとつながることの豊かさを学び、この街で職を得て、もともと引きこもっていたダメな自分が圧倒的にかわったんです」と。最後に延藤氏が議論をまとめたキーワードは「あいだをつなぐのがアート」です。アーティストも行政も市民も、人とまちも、まちを変える若者同士も、違和感と共感、歴史と未来、面倒と楽しさ・・・様々な「あいだ」をつなぐセンス漲る参加者たちの発言に圧倒される会は、最後に懇親会で食を共にし、幕を閉じました。

*

日本の「ふるさと」をとりもどそう！

東日本大震災から3年の月日が経ちました。私たちのNPOでは仙台市沿岸部の荒浜地区を訪れ、ふるさとを取り戻す「荒浜再生を願う会」の支援を継続してきています。月に1度赴く度に、東北復興を考えることは、日本の「ふるさと」の在り処を深く問うことであり、わたしたちのまちの希望へ

の道筋を考えることだと実感します。錦二丁目・長者町界限での活動も、荒浜の方々から学ばせていただいたている、学んだことを生かす責任がある、とも思うのです。

都心でも「ふるさと」と呼べる

まちにしよう

長者町地区では「長者町家部会（錦二丁目まちづくり協議会）」を中心に、住む人を増やす取り組みをしています。単純に夜間人口という量的増加ではなく、地域に愛着をもち、「ここに生きる人」を増やすことで地域が元気でありつづけることを目指しています。

そんな視点で、2014年3月17日に「こんな長者町家型シェアハウスがあったらいいナ！」をテーマにワークショップを開催しました。はじめに、名古屋でのシェアハウスの運営経験が豊富な伊藤正樹さん（SHARE HOUSE180代表）にシェアハウスの事例の紹介や運営のポイントなどを伺いました。その後、20年以上海外生活をしている小出さん（錦二丁目出身）が帰省しているということや、身が帰省しているということをチャンスに、血の繋がりのない他人でも「共に住む」という現代的なライフスタイルについて経験を伺い、私たちの

目指す都心居住のあり方のヒントにさせていただきました。

次に長者町家部会から提案する「長者町家型シェアハウス」の特徴について武藤隆さん（大同大学教授）より説明がありました。第一に、住み手同士のつながりだけでなくまちとのつながりがある。第二に、このまちに多くある40坪程度のコインパーキングを生かしつつ敷地とし、住居の場にもしていくこと。第三に、第一・二の特徴を実現する空間・事業モデルのオリジナルな開発。

この提案を受けてみなさんのグループワークはプライベートを守りながらも共同のメリットを分かち合える空間提案をするグループ、まちに飛び出す共用空間として、シェアハウス以外の建物でも3階4階等空いている空間を音楽スタジオ等の文化拠点や、収納スペース、ジム、図書館に、または今あるサービスを生かす等、まち全体で高付加価値を実現して経営的にも成り立つしくみ、等々、目からウロコのアイデア満載でした。これらは都心は「ふるさと」になり得るかという、根源的問いに答えるような提案でもあり、着実に実現に向けて歩み始めた実感を得た会でした。



長者町家のしゃべり場第2回（3月17日18時半から20時半／場所…吉田商事1階）・グループワークの様子

TOPICS

「荒浜ふるさと」の味」を
長者町で！ 長者町家ワークシヨッ
プで大活躍していた長者町ゼミの
面々は、実は荒浜の「黄色いハンカチ
プロジェクト」でも、長者町の黄色い
繊維を使ってハンカチ縫い等の力を
發揮した方々。彼らの食事会（伊藤早
苗さん主催）では荒浜の方々からの
お礼で送られてきた黄色いたくあん漬
が並びました。蘇生した荒浜の畑で採
れた大根です。この食事会自体が新し
いふるさととしての長者町のライフ
スタイルを提起し、既に現実が先を行
っているようにも思う、可能性に満ち
たひと時でした！（名畑）



まちの縁側 GOGO! ルポ

名古屋市東区「まちの縁側 GOGO!」の
支援事業

問合せ（担当：永井）

Tel / Fax 052-930-2505



共に歌えば心が晴れる

写真は月に1度の「ほのぼののコンサ
ート」の様子です。GOGO!の外に
飛び出して、近くのイタリアンカフェ
LOKOで農園野菜のピザと珈琲を
囲んでみんなで歌う特別な日です。こ
の日の最年長は86歳！この日のた
めに、ほのぼののリハーサルと称して週



に1度GOGO!
O!で歌の会
がひらかれま
す。発表の場が
あるから張り
合いがあつて
みなさん生き
生きしていま
す！

定期利用で素敵な生き方に、

チャレンジしよう！

まちの縁側GOGO!はキッチン
やバリアフリートイレ、プロジェクト
1、スピーカー等々揃っていてリビン
グのような居心地のいい空間、加えて
2千円で2時間借りれるとあって、気
軽に新しいことにチャレンジできま
す。例えば、わたくし名畑の場合、地
域のシニア世代のニーズによって月
一回ライフワークで携帯・パソコン相
談室をしています。「自分がパソコン
なんて教えられるかな」と少し不安で
したが、自分ルールを作ればいいんで
す！「お茶付／質問を持参すること／
一緒に悩んで解決できたら500円／
5分いても2時間いてもOK」とゆる
ーく探り探りスタートしました。やっ
てみるとこれがとっても面白い！小
さな規模で、おしゃべりしながら、一
人一人のニーズに寄り添うやり方を
しています。「釣り日誌の表づくり

チャレンジしたい」「好きな歌の歌詞
カードをつくりたい」「ふかふかの寝
台シートの高速バスを自分でネット
予約して、東京へ行きたい。」など、
参加者の素敵なライフストーリーが、
返って私の宝物になります。
他にもチャレンジしたいことを、G
OGO!で気軽にはじめてみようか
な・・・

「趣味のじかん」しませんか？

私はこんな風にも、利用しています。
GOGO!の古いバレエレザーデー
イスクを鑑賞しながら、その作品にび
つたりのワインと料理を楽しむ会「バ
レエナイト」。忙しいと、自分の趣味
の時間って後回しになりがちなので、
バレエ好きな私はあえて鑑賞日時を
決めてセミオープンにすることで、き
つちり自分も楽しみつ、他の人にも
その楽しみをお裾分けする場にする
んです！ワインセレクトも好評、バレ
エに興味のない人も、意外とバカバカ
しいバレエの物語を知って皆でワイ
ワイ騒ぎながら観ていたら楽しくな
っちゃったそうです！「趣味のじか
ん」しませんか？（名畑）

ENGAWA NEWS 86号

発行…2014年4月15日

編集発行…NPO法人まちの縁側育くみ隊

名古屋市中区錦2-13-1宮本ビル4F

Tel / Fax 052-201-9878